

# 東日本大震災時の 都留文科大学生たちの行動

## Behavior of the Tsuru University Students on the Day of the Great East Japan Earthquake

前田 昭彦

MAEDA Akihiko

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の動機

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災時の発生時、春休み中ながらそれなりの人数の学生が帰省しておらず、本学周辺にいた。地震の影響で、停電、それを原因とする断水、また度重なる余震などで、学生たちは不安を感じ、数名で集まって当日夜を過ごすなどの「ふだんとは違う」行動をとっていた。

本研究を共同して行った山岸良（2011年度社会学科卒業）も、地震当日、そうした経験をした。きわめて貴重な記録であるので以下、長くなるが山岸の卒業論文から抜粋する。

---

ある学生（本研究の共同研究者）の地震発生から翌日までの行動

---

2011年3月11日 13:00頃～

・友人の下宿先2人でのんびり過ごしていた。

14:46～

・地震発生。

一ゆっくりゆらゆら動く横揺れであった。最初は小さくゆっくりとした揺れで、すぐ収まると思っていたが、1分以上揺れ続けるので大きな不安に駆られたのを覚えている。

一揺れは次第に大きくなり、大きな揺れと小さな揺れが何度も続いた。部屋では棚から物がばらばらと落ち、アパートの外でも人が騒ぎ始め、これはただ事ではないと思い始めた。

一とにかく漠然とした不安に駆られ、とりあえず窓とドアを開け様子をうかがった。

15:55頃～

・大きな揺れが落ち着き、ゆっくりとした動きの余震となる。

一テレビで情報を得ようと考え電源をつけようとしたが、その時にはすでに停電状態になっておりテレビを使えなかった。

一それに加え、停電に伴い断水され、水道・トイレも使うことができなくなっており、既にやや絶望的な気持ちになっていた。

16:10頃～

・コンビニへと向かう。

一最初は電気だけではなく水も完全に出なくなっているものだと思い、この状況がいつまで続くかわからないので、とにかく飲み水・食料だけはある程度確保しようと考え、歩いて10分ほどのファ

ミリーマートへ2人で向かうことにした。  
－3月で晴天とはいえ外はかなりの寒さであったので、しっかり防寒をしてアパートを出た。

**16：15頃～**

・外の様子。  
－ファミリーマートに向かう途中で、停電に伴い信号機も機能していないことに気がついた。警察官も到着していなかったため、車道を走る車はどの車も慎重な運転であった。  
－この時点で、外にはそれほど人もおらず静かで、信号機の停止以外には特に変わった様子はなかった。

**16：20頃～**

・ファミリーマートに到着。  
－店内は薄暗く、多くの人で溢れていた。  
－携帯電話のポータブル充電器（乾電池で稼働するタイプ）は既に売り切れており、飲料水・食品もかなり少なくなっていた。  
－レジ前には長蛇の列ができており、店員は電卓で会計をおこなっていた。  
－非常に混雑していたため、ファミリーマートでは何も買わずに、そこから歩いて10分程のスーパーマーケット、オギノに向かうことにした。  
・オギノに到着。

**16：35頃～**

－残念なことにオギノは既に店を閉めており、店内に入ることができなかった。  
－ただ、オギノの入口前に来ていたたこ焼き屋はやっており、10人弱の人が並んでいた。  
－たこ焼き屋はラジオを流しており、そこで少し状況を把握することができた。  
－並んでいる列の中にわたしが所属しているサークルの知り合いが2、3人おり、そこで少し話をした結果、とにかくみんな不安でいっぱいだったので、知り合いのうちの1人、Nの下宿先に集まることになった。  
－あの時はとにかく1人になるのが恐かったので大人数で集まることができるのは安心だった。  
・自宅の様子を見に行く。

**16：40頃～**

－Nの部屋に集まる約束をしたあと一時解散。友人と共に自分の下宿先の様子を見に行く。

・自宅に到着。

**16：55頃～**

－引き出しが少し開いていたくらいで落下物等、特に被害は無かった。  
－自分の部屋では水道もトイレも使え、ここで初めて全てのアパートが断水しているわけではないことが分かる。  
－既に寒く、今後さらに冷え込むことが予想されたので厚手のジャケットやマフラーを着こみ、カセットコンロ・懐中電灯・部屋にあった500 mlのミネラルウォーター2本をバッグに詰め込み部屋を出た。  
－その準備をしている頃には日が沈み始めて部屋の中は夕暮れの薄暗さにつつまれ、さらに不安を掻き立てられた。そのときもずっと余震は続いていた。

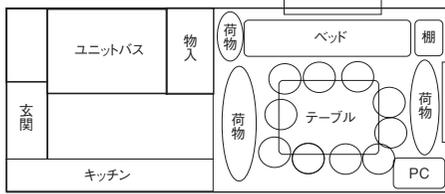
**17：05頃～**

・Nの下宿先へ向かう。  
－日が沈み始めるなか、2人で歩いてNの下宿先へ向かう。  
－外では防災無線が何度も流れていたが、音が反響してやや聞きづらいという印象であった。

**17：35頃～**

・Nの下宿先に到着する。  
－到着してからはすぐに日が沈み、街灯も点かないため本当に暗闇となった。  
－サークルの仲間が徐々に集まり、人数は最終的に10人となった。  
－それぞれがロウソクや懐中電灯、ガスコンロ、食材、飲み物などを持ち寄った。  
－部屋ではロウソク数本と電池で稼働するごく小さなランプでうっすら明りを確保し、とにかく雑談をしたり、トランプなど簡単なゲームをしたりして過ごした。  
－停電は続いていたので夜は非常に寒かったが、6.5畳の広さの部屋に10人が集まっていたので寒さはなんとか凌ぐことができた。  
－この間も何度も余震があり、大きくはないがずっとゆらゆら揺れていた。  
－ロウソクを点けていて危険もあったため、ほとんどの人ができる限り起きていた。  
－当日の部屋の見取り図、状態は以下のとおりである。学生アパートに10人の人が集まったため、

荷物も多く室内はかなり窮屈な状態であった。



### 3月12日 深夜2時・3時頃

—だいたいの人の携帯電話の充電が切れ始め、再び不安が募り始めていた。わたしの携帯電話は極力使用していなかったので、停電中ではもたせることができた。

—同時にその時間帯はやや大きめの余震が頻繁に発生しており、充電が余っている人の携帯電話からは緊急地震速報が何度も鳴るようになった。

—ひとりが携帯音楽プレーヤーでラジオを流し始めたため、音量を最大まで上げてイヤホンからみんなで聴いた。そこで初めて、昼間の大地震の震源が東北であること、津波が発生しその被害が甚大であること、頻繁に発生する余震が長野、茨城、福島、栃木などさまざまな場所で発生していることなど、おおまかに状況を把握することができた。

—なかには出身地が長野県の人や栃木県の人もあり、実家の地域も大きく揺れているというニュースを聴き、ややパニック状態に陥っている人もいた。にも関わらず携帯電話の充電は既に切れており、災害時の連絡手段の無さは本当に不安なもの

なのだと感じた。だいたいの人は、まだ充電がある人の携帯電話を借り、実家に連絡を取った。

—わたし自身も実家が栃木県にあり一時心配もあったが割とすぐに家族と連絡を取ることができた。

—ラジオでも緊急地震速報が頻繁に鳴っており、あの音を聴くととにかく不安が膨れ上がった。

### 05:00頃～

・電気の復旧

—そうこうしているうちに時間は経過し、朝の5時頃になったときに突然停電が復旧した。その瞬間はわたしは起きていたのではっきりと覚えている。まず冷蔵庫の「ブーン」という音になって、「ん？」と思ったときに明りが点いたのだ。

—明りが点くとまずはテレビをつけ、同時にみんな携帯電話の充電を始めた。やはり携帯電話は必需品であるのだと改めて感じた瞬間だった。

—テレビではどの局でも枠外に日本地図が表示され、各地の震度が表示されており、津波の悲惨な映像を流していた。そこで初めて、映像として今回の災害の悲惨さを目の当たりにしたので、テレビに映し出された光景が現実のものとは思えなかった。

—その後、全員がその場で各々眠りについた。

### 08:15頃～

・アルバイトへ

—わたしは朝9時からアルバイトだったので、しぶしぶアルバイト先に向かった。

このように「集まって夜を過ごした」という話を複数の学生から聴き、筆者は関心を持った。住宅が居住不能なまでに損壊しているわけでもない状況で、このような行動が大量にあったとしたら、それはとりもなおさず都留文科大学の大きな特性と言えそうだからだ。

4年生だった山岸は卒論に防災関連のテーマを扱うと言っていたこともあり、それならば都留のことを調査しては、とすすめたところ、山岸も問題意識を共有し、筆者と共同研究を行うことになった。当初はこうした経験をした学生をつかまえてじっくり話を聴く質的調査も考えたが、まずは全体状況を把握してみたい、ということで全学的なアンケート調査をすることにした。

アンケート調査の概要は、資料(19頁)に示す。2011年11月末から12月にかけて行い、2～4年の全学生を対象にした。2011年3月の地震当日の時点で在学している学生である。全学科の2～4年にもれなく調査票が配布できるよう、調査者が授業を選び、各授業の担当教員にアンケート票の配布、実施、回収を依頼した。1,080票を有効票として回収

できた。回収率は42.7%である。

## 1.2 アンケート実施上の問題

ところで地震当日は春休み期間であるので、当然のことながら帰省している学生が多数いる。我々の当初の問題関心は、前述のように「地震当日大学周辺にいた学生の行動」となるが、それだけを対象にすると大量の「非該当」票が生じることとなる。

そこで設計上は、帰省していた学生に対しても有効な問をおき、今後大学として策定する災害対策などで使い得る資料とすることを目指した。結果的に自由回答を入れた45問中35問が全員を対象とする設問となっている。したがって、実施したアンケートには当初の問題関心を越えた内容を多くもりこんでいる。

## 1.3 本稿の課題

しかしながら、本稿で扱う内容は最初の問題関心に限り、中心的分析対象を「大学のまわりで地震にあった学生」とする。すなわち、帰省などしておらず、地震発生時に大学に近いところにおいて、当日夜に「授業期間と同じ住まいに帰宅するつもりだった学生の行動」を明らかにすることが本稿の目的である。

ここで、どこまでを「大学のまわり」と捉えるかは、少しやっかいな問題をはらんでいるが、「富士急行圏内」ということにした。おおむね学生のアルバイトや、日常的買い物、気軽な日帰りレクリエーションがこの範囲で行われているとの判断による。もっとも、「富士急行圏外」にいても、当日、夜、大学周辺の下宿に帰宅するつもりだった学生もいるはずで（例えば、就職活動やショッピングで東京に出ていた）、これらは本来分析対象に加えられべきだが除外する<sup>1)</sup>。

では、本論文での分析対象となる学生はいったいどれくらいいたか？ アンケート結果を表1に示す。

「大学敷地内」90名 (8.4%)、大学から「徒歩10分以内」272名 (25.3%)、「同10～20分」101名 (9.4%)、「同20～30分」36名 (3.3%)、「徒歩30分超～富士急行圏内」77名 (7.2%)の学生がいた。これらをあわせた「大学とその近辺」576名 (53.6%)が、本稿にお

表1 地震時どこにいたか (問1～問3)

大学とその近辺	576 53.6%	学内 (敷地内)	90 8.4%	文大敷地内	90
		大学周辺	486 45.2%	徒歩10分以内	272
				徒歩10～20分	101
				徒歩20～30分	36
徒歩30分超	77				
大学周辺外	500 46.5%	大学周辺外	500 46.5%	富士急行圏外	500
全体 (場所が明らかな学生)					1,076
無回答					4
全体					1,080

ける分析対象となる。なお、帰省していたなどの大学周辺外＝富士急行圏外は500名(46.5%)であった。休暇中の帰省率といったデータはおそらくとられたことはないが、率直なところ「意外に多くの学生が帰省しないで大学周辺にいた」という感想を持った。

なお、「富士急行圏外＝大学周辺外」にいた学生について言及しておく。どこの都道府県にいたか問うたが、全国から学生を集めている本学の特性通り、北海道から沖縄までまんべんなく分布していた。留学中の学生も35名いた。また、福島県、宮城県、岩手県など被災地にいた学生もあり、自由回答欄にすさまじい体験を書いてくれた人もいた。

## 2. 地震がおきた時

### 2.1 大学とその近辺にいた学生のプロフィール

#### (1) 下宿／自宅別、男女別

大学とその近辺にいた576人のうちわけは次のようになる。

住まい別にみると、下宿生514人、自宅生41人、その構成比は92.6%－7.4%。在学生全体でのこの比率を比較したいところだが、そのようなデータはおそらくない。なお下宿全体の56.4%が、自宅生全体の34.2%が「大学とその近辺」にいた。

男女別にみると、男性198名、女性356名、構成比35.7%－64.3%で女性の方が多い。むしろ、この値は本学における男女の構成比を反映しているものである。なお、男女別の「大学とその近辺にいた割合」は男性58.9%、女性51.0%と男性の方が高い。一般に女性の方がより帰省をしがち、というのはありそうな話だが、それを反映しているのかもしれない。

なお、上記で各要素数の総和が576と一致しないのは、「無回答」があることによる。

#### (2) 学科別・学年別 学生が大学とその近辺にいた割合(表2)

大学とその近辺にいた学生の実数を学科別にみると、初等教育学科163名、国文学科73名、英文学科121名、社会学科147名、比較文化学科69名となっている。

ところで、長期休業時にどの程度の学生が帰省していないか、というのはおそらくデータとしてとられたことはないであろう。表2に、学科別・学年別にみた「大学とその近辺にいた割合」を示す。なお、表頭の学年は2011年3月時点の学年とした。

表2 学科別・学年別、大学とその近辺にいた割合(2011年3月時点の学年)

	1年	2年	3年	1～3年
初等教育学科	58.1%	65.5%	61.3%	62.7%
国文学科	41.0%	54.5%	51.1%	48.0%
英文学科	65.3%	38.7%	45.0%	48.6%
社会学科	56.3%	61.1%	58.5%	58.5%
比較文科学科	29.7%	50.9%	49.0%	44.8%
全学科	52.3%	54.9%	53.8%	53.8%

N=1,039

学年による差は3%未満で特には認められない。既に卒業してしまった4年生のデータは、今回とれなかったわけだが、4年生は引越など卒業準備のため、より高い比率となったかもしれない。次年度も在籍する1～3年の比率に差がないというのはとりあえず納得しやすい結果であるとともに、学年という点からはそれなりのランダムサンプリングができていそうである。

一方、学科別にみると、初等教育学科62.7%と最低の比較文化学科44.8%は18%の大きな差が見られる。学科・学年別にみると国文1年(41.0%)、英文2年(38.7%)、比較文化学科1年(29.7%)が低い。一方、初等教育学科2年(65.5%)・3年(61.3%)、英文学科1年(65.3%)などが6割を超えておりかなり高い。ひょっとしたら学科や学年を理由とする差があることもありえるが、現段階では不明である。

2.2 地震時にいた場所の詳細(表3)

表3に、大学とその近辺にいた学生が具体的にどこにいたか示す。左側のブロックが大学敷地内にいた90名のいた場所、右側のブロックが大学周辺にいた486名のいた場所を大学からの距離圏別(3区分)に示したものである。さらに、場所ごとに地震時に感じた恐怖の度合い(問6=「揺れている最中にどの程度の恐怖を感じたか」に「とても怖い」「怖い」と感じた学生の割合)をそれぞれの右の列に収録した。

表3 地震時にいた詳細な場所、及びそこで「とても怖い」「怖い」とした割合<sup>\*2</sup>

学内(敷地内)			大学周辺					
	人数	とても怖い・怖い、とした率	距離圏別人数				とても怖い・怖い、とした率	
			10分	10～20分	20分超	合計		
教室	26	84.0%	自分の下宿	184	70	16	270	68.7%
体育館	22	68.2%	友人の下宿	23	10	1	34	70.6%
その他の建物内	9	50.0%	自分の実家	1	1	16	18	64.7%
グラウンド	7	57.1%	店舗	27	8	22	57	62.5%
テニスコート	6	83.3%	病院	2		2	4	50.0%
音楽棟	4	75.0%	事務所・事業所			9	9	66.7%
敷地内の屋外	3	33.3%	その他の建物内	11	7	20	38	60.5%
キャリアサポート室	3	100.0%	自動車内	3		13	16	21.4%
図書館	2	50.0%	電車内			2	2	0.0%
本部棟	2	100.0%	バイク・原付に乗車			2	2	0.0%
コミホ	1	100.0%	自転車に乗車	1		1	2	0.0%
学生ホール	1	100.0%	歩行中	7	4	3	14	41.7%
3号館・ホール	1	100.0%	その他の屋外	3		4	7	71.4%
研究室	1	100.0%						
市民体育館	1	0.0%						
保健室	1	0.0%						
学食、クラブハウス棟	0	—						
無回答	0		無回答	10	1	2	13	—
総計	90	73.3%		272	101	113	486	67.2%

N=576

学内では、教室26名（28.9%）、体育館22名（24.4%）が多い。ちなみに「何をしていたか」（問5）とクロスしてみると、教室にいた26名中17名が「サークルなどの課外活動」、5名が「なんらかの勉強・研究をしていた」、体育館、グラウンドにいた全ての学生が「サークルなどの課外活動をしていた」と答えている。

大学周辺にいた学生については、半数以上の55.6%（184名）が自分の下宿にいた。

場所別の恐怖感についてみる。学内と大学周辺を比較すると、学内の方が周辺より恐怖感が少し高い（学内73.3%—周辺67.2%）。特に学内については、場所別になるとサンプル数が少なくなり、あまり意味を持たないが、参考までに場所別に示している。学内では教室にいた学生26名は、84.0%が「とても怖い」「怖い」と回答している。

### 3. 当日夜の学生たちの行動

大学周辺にいた学生の地震当日夜の行動を明らかにするため、問13～問22の10問を準備した。この10問は、「大学周辺にいた学生」専用のものである。以下、これらの問を中心に分析を進める。

#### 3.1 地震を原因とする普段と違う行動

##### （1）地震当日の夜、ふだんと違う過ごし方をしたか（表4）

問14に「地震当日の夜は、地震を原因として普段と違う過ごし方をしましたか」という問をおいた。我々が知りたいのは、特に地震による「普段とは違う行動」であるが、それは結局のところ、回答者の主観的感想をたずねるしかないからである。

全体では、14.1%（81人）が「普段通りだと思う（地震がなくても、おおむね同じ行動したと思う）」と答え、80.2%（462人）が「違う過ごし方をした（地震が原因で普段の過ごし方と変わったと思う）」と答えた（無回答は33人／5.7%）。

「実家から通学」している自宅生の方が下宿生よりも、「普段と同じ過ごし方をした」としている人が多い。実際、両者には大きな差がある。すなわち、「普段通り」と答えた学生は「下宿」12.3%に対し、「実家から通学」はおおむね3倍の39.0%となっている。

また、男女別にみると、女性の方が「ふだんと違う過ごし方をした」方がやや多い傾向がある（男性75.8%—女性82.6%である）<sup>\*3</sup>。

「違う過ごし方をした」答えた学生462名の学生のうちわけは、下宿425人、実家20人（無回答17）となっており、95.5%が下宿生である（無回答を除く構成比）。ちなみに男性150名に対して、女性は294名で、おおむね男性の2倍の女性が含まれている。

表4 地震当日の夜は地震を原因として普段と違う過ごし方をしたか？—問14

	全体	住まい別		男女別	
		下宿	実家	男性	女性
普段通りだと思う	14.1%	12.3%	39.0%	18.2%	12.1%
違う過ごし方をした	80.2%	82.7%	48.8%	75.8%	82.6%
無回答	5.7%	5.1%	12.2%	6.1%	5.3%

N=576

**(2) 違う過ごし方をした理由 (表5)**

前問で「違う過ごし方」と回答した人462名を対象にその理由を問うた複数回答の設問である。全体では「停電や断水で生活に支障が出たから」76.2%、「精神的に不安だったから」52.4%がともに高く、半数を超える学生が理由にあげている。

男女別に見ると、特徴があらわれている。特に「精神的に不安定だったから」は女性60.9%、男性34.0%と大きな開きがある。「普段いるところに危険を感じたから」も女性の方がやや多い(女性17.3%、男性12.7%)。「停電や断水」の物理的問題については、男女であまり差が無い。

なお、「その他」(25票)の記述欄には、「友人とかたまっていた」「情報が欲しかったから」「友人に誘われたから」などがあがっている。

**表5 地震当日、ふだんと違う過ごし方をした理由 (問15—複数回答)\*4**

	全体	男性	女性
普段いるところに危険を感じたから	16.0%	12.7%	17.3%
精神的に不安だったから	52.4%	34.0%	60.9%
停電や断水で生活に支障が出たから	76.2%	78.0%	75.5%
帰宅手段(移動手段)が無くなったから	1.7%	1.3%	2.0%
その他	5.4%	10.0%	3.4%
無回答	1.7%	3.3%	1.0%
人数	462	150	294

**(3) 当日夜、違う過ごし方をした場合、具体的な過ごし方はどうだったか (表6)**

「普段と違う過ごし方」をした場合の具体的な過ごし方は、「友人ないし自分の下宿に(複数)集まった」と答えた学生がもっとも多く283名(61.3%—「違う過ごし方」をした462名が分母)にのぼった。実家、近所の人の家に集まった例を加えると293名となる。この数は「大学とその近辺」にいた全体・576名を分母にとると50.9%となり、半数以上の学生が当日夜、自発的に集団で過ごしていた。これはかなりの規模とみるべきであろう。言うまでもなく、この点は我々が当初の問題意識でもっとも知りたかったことである。

また「普段と同じ下宿、自宅などで過ごしたが普段と違う過ごし方をした」という学生は26.0%(120名)となった。

表6には、これまで差がみられた男女別の回答率も示しておいたが、ここでは大きな差は見られない。

**(4) 同じ場所にいたが、違う過ごし方をしたケース (表7)**

およそ4分の1にあたる120人が「普段と同じ場所にいたが、普段と違う過ごし方をした」としている。この選択肢は記述付き回答欄としたが、103人が具体的に記述してくれた。これも当日の夜の行動を明らかにする貴重なデータであり分析を加えておこう。

記述のキーワードを拾い、複数回答とみて表7に整理した。もっとも多かったのは「(停電などで何もできずに)早く寝た」という記述で、33.0%にあたる34名がこう答えている。

表6 地震当日の夜、普段と違う過ごし方をした場合、その過ごし方（問16—単数回答）

	全体		男性	女性
	人数	回答率	回答率	回答率
友人の下宿に集まった（自分の下宿に友人が集まった）	283	61.3%	58.7%	62.6%
友人の実家に集まった（自分の実家に友人が集まった）	6	1.3%	1.3%	1.0%
近所の人など、友人以外の住居に集まった	4	0.9%	0.7%	1.0%
文大の図書館で夜を過ごした	23	5.0%	6.0%	4.4%
文大のクラブハウス棟で夜を過ごした	0	0.0%	0.0%	0.0%
実家に帰ることにした	4	0.9%	0.0%	1.4%
その他の場所で過ごした	19	4.1%	5.3%	3.4%
普段と同じ場所（下宿、自宅など）にいたが、普段と違う過ごし方をした	120	26.0%	26.7%	25.9%
無回答	3	0.6%	1.3%	0.3%
人数	462		150	294

次いで「停電」を原因とするものが31.1%（32名）。具体的には「停電し、断水もしたので食事の時以外寝ていた」「停電したので早く寝た、余震がおこってもすぐ動けるように準備した」「停電していたので暖がとれずすぐふとんにもぐった」などがあった。

なお「複数で集まった」は「友人と一緒にいた」「友人をよんだ」などの回答であり、実質的には、選択肢に入る内容であった。この5名を加えると当日「集まって過ごした」学生は298名（283+6+4+5）となる。

興味をひかれる回答としては1名だが「眠れず、まったく知らない同級アパートの人の連絡をとりあった」というものがあった。

表7 違う過ごし方の内容（記述回答を複数回答と見て集計—問16）

早く寝た／ふとんにくるまった	34	33.0%
停電	32	31.1%
避難の準備／寝方をかえた	13	12.6%
ろうそく	10	9.7%
寝られない／寝ない	9	8.7%
断水	8	7.8%
寒さ対策をした	8	7.8%
ラジオ・テレビ等つけっぱなし・携帯を手放せない	7	6.8%
実家（自宅生）で家族一緒にの部屋に寝た	6	5.8%
懐中電灯	5	4.9%
複数で集まった	5	4.9%
寝る直前まで文大図書館にいた	1	1.0%
連絡をとろうとした以外何もできない	1	1.0%
入手できるだけ食料品を購入	1	1.0%

N=103

### 3.2 友人と集まって過ごした場合

#### (1) 集まって過ごした場合、最高で何人くらいあつまったか (問17-図1、表8)

「友人または自分の下宿に集まった」283名、「友人または自分の実家に集まった」6名、「近所の人など友人以外の住居に集まった」4名の計293名に「最高で何人くらいの方が集まりましたか」問うたものである\*<sup>5</sup>。無回答17名、不明1名をのぞき275名が具体的な数を書いてくれた\*<sup>6</sup>。

図1に男女別に集まった人数10人までの回答率（「集まって過ごした」293名を分母とする）を示した。ここでも男女の差が若干見てとれる。女性では2人が最頻値で2～4人で集まっているケースが多いのに比べ、男性では5名が最頻値となっており5人以上が多そうである。

2～4人でまとめて回答率をみると男性36.8%、女性60.7%（全体53.8%）、5～9人では男性48.3%、女性27.0%（全体33.1%）となる。すなわち女性の6割が2～4人で集まり、男性の5割が5～9人で集まっている。女性の方が小規模で集まっている傾向を見て取れる。10人以上では男性14.9%、女性12.4%（全体13.1%）と大きな差はない。

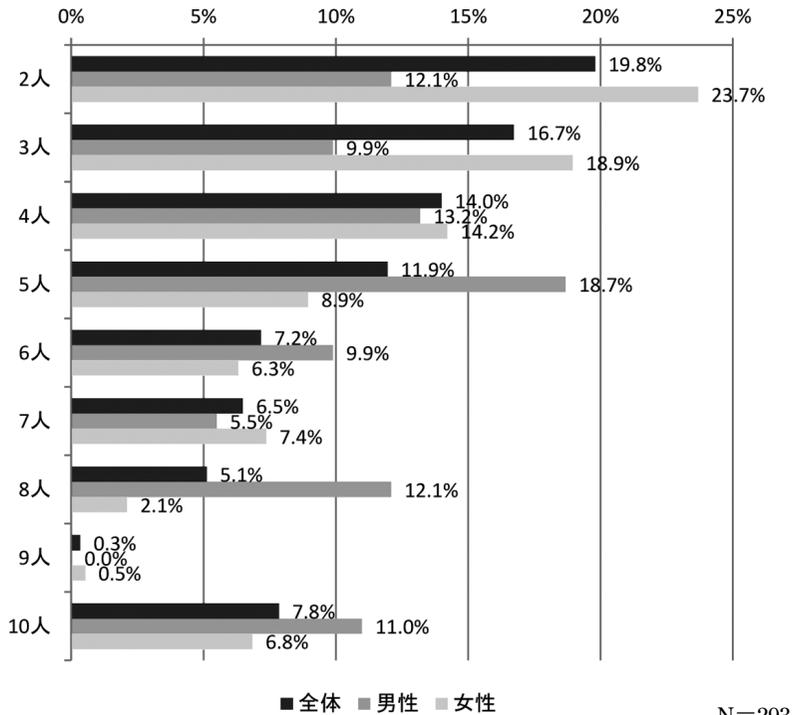


図1 最高で何人くらい集まったか (実数=10人まで一問17)

表8 集まった人数の規模一問17

	全体	男性	女性
2～4人	148 (53.8%)	32 (36.8%)	108 (60.7%)
5～9人	91 (33.1%)	42 (48.3%)	48 (27.0%)
10人以上	36 (13.1%)	13 (14.9%)	22 (12.4%)
人数	275	87	178

不明・無回答をのぞく275名の集まった人数の平均をとると全体で5.16人、男性では5.78人、女性では4.92人となる。冒頭に紹介した山岸の経験でも広いとは言えない下宿に10人が集まっていた通り、大人数で集まった例がけっこうあったようだ。10人以上と答えた人は36名、集まった最大は20人で3名、次いで17人が1名、15人が5名となっている。

### (2) どのような経緯で集まったか (表9)

地震当日の夜を(普段と違って)複数の人で過ごした人に、どのような経緯で集まったかを聴いた。集計は、前問の人数の間に具体的な数を書いた人を対象にした。全体で見ると、「携帯などで連絡をとりあった」が57.2%と最も多く、次いで「たまたま屋外で友人と会った」25.2%となる。男女別に差は見られない。さらに前問で男女で差のあった集まった人数の規模別・男女別にもみてみたがそれによる差はほとんどなかった。

「その他」の記述欄には「もともといっしょにいた」「サークル、部活の流れ」などが多く、「文大の図書館から友人が来た」も複数みられる。「友人がどうしているか気になったので訪問して一カ所に集まるようよびかけた」「twitter」などの回答もあった。

表9 複数で集まった経緯 (問18—複数回答)

	全体	男性	女性
たまたま屋外で友人と会ってそのようにした	25.2%	25.3%	26.1%
携帯電話などで、友人と連絡をとりあって集まった	57.2%	60.9%	58.3%
直接、その場所を訪れてそのようにした	13.3%	13.8%	11.7%
リーダー的な人がいてその人がよびかけた	6.1%	9.2%	4.4%
文大の図書館が開放されていることを知ったから	2.2%	3.4%	1.7%
その他	16.2%	10.3%	17.8%
無回答	1.4%	2.3%	1.1%
人数	278	87	180

### (3) どんなメンバーで集まったか (表10)

集まったメンバーは、「サークル・部活」が最も多く46.4%、「学科の友人」29.1%、「いろいろ」18.3%となっている。

表10 集まったメンバーの属性 (集まった人数の規模別—問19)

	全体	集まった人数の規模別		
		2~4人	5~9人	10人以上
サークル・部活	46.4%	34.5%	50.0%	84.2%
学科の友人	29.1%	36.5%	26.1%	7.9%
授業での友人	1.1%	1.4%	1.1%	0.0%
バイト仲間	3.2%	5.4%	1.1%	0.0%
いろいろ	18.3%	18.9%	21.7%	7.9%
無回答	1.8%	3.4%	0.0%	0.0%
人数	278	148	92	38

集まった人数の規模別にみると「人数が多いほど」、「サークル・部活」であることが多い。10人以上の規模では84.2%、5～9人では50.0%となっており各グループで最頻値となっている。2～4人では「学科の友人」とした回答が36.5%と最も多い。

### 3.3 地震当日、就寝した場所 (表11)

「集まって夜を過ごした」場合でも自分の住まいに友人たちが来る場合と、友人の住まいに行く場合がある。それを区別する必要があることもあり、当日就寝した場所に関する質問を入れた。まず、当日の夜就寝した場所がいつもと同じかどうか問い (問20)、続けて「いつもと違うところ」と答えた学生に、具体的に就寝した場所を問うた (問21)。

表11はこの2つの設問を統合して、大学とその近辺にいた学生が当日どこで就寝したかを示した。

まず、全体で57.0% (303名) の学生が「いつもと同じところ」で就寝したと回答し、42.7% (227名) が「いつもと違うところ」と回答している。

住まい別にみると、ごく自然なことだが、実家通学生 (N=35) の85.7% (30名) が「同じところ」と答えている。これに対し、下宿生で「同じところ」と答えているのは、55.2% (264名) に過ぎず、44.6% (213名) が「違うところ」と答えている。男女別にみると、女性の方が「違うところ」と答えた比率が高い。48.0% (145名) と男性38.5% (67名) よりおおむね10%上回っている。また、女性は「友人の下宿」に泊まったと答えた割合が40.4% (122名) と男性27.0% (47名) とかなり高い。

表11 地震当日の夜、就寝した場所<sup>\*7</sup> 一問20、21

	全体									
			自宅生		下宿生					
			人数	比	全体		男性		女性	
人数	比	人数			比	人数	比	人数	比	
同じところ (下宿・実家通学の自宅)	303	57.0%	30	85.7%	264	55.2%	107	61.5%	156	51.7%
違うところ										
友人の下宿	179	33.6%	1	2.9%	170	35.6%	47	27.0%	122	40.4%
友人の実家	8	1.5%	1	2.9%	7	1.5%	2	1.1%	5	1.7%
自分の実家	7	1.3%	3 <sup>*8</sup>	8.6%	4	0.8%		0.0%	4	1.3%
近所の人など、友人以外の住居	5	0.9%			5	1.0%		0.0%	5	1.7%
文大図書館	18	3.4%			17	3.6%	9	5.2%	8	2.6%
車中	2	0.4%			2	0.4%	2	1.1%	0	0.0%
体育館 <sup>*9</sup>	1	0.2%			1	0.2%		0.0%	1	0.3%
寝ていない	2	0.4%			2	0.4%	2	1.1%	0	0.0%
バイト先	3	0.6%			3	0.6%	3	1.7%	0	0.0%
ホテル等	2	0.4%			2	0.4%	2	1.1%	0	0.0%
無回答	2	0.4%			1	0.2%		0.0%	1	0.3%
全体	532	100%	35	100%	478	100%	174	100%	302	100%

※N=532 (大学とその近辺576から問20の無回答44を除いたもの)

#### 4. 当日の詳細な行動の事例

##### 4.1 4つのパターン

アンケート調査では、個々の行動についてそれほど詳細には調べることはできない。しかし、ある程度それに近づけるために、問13で、地震発生時から就寝するまで行った一連の場所をすべて書き出してもらう設問をした。

9ヶ所を上限に、18個の選択肢（うち3つは記述付き）から選ぶもので、きわめてめんどうなもので倦厭されないか不安だったが、結果的には無回答は32票（576票中）、記載された場所数は平均で3.8ヶ所と比較的良好いデータがとれたのではないかと考える。

ここではこの問13を使って、もう少し詳細な当日の行動例を示す。

さて、当日の行動を考えるにあたって、（1）地震後の行動がふだんの行動と違ったものだったか（問14）、（2）当日、就寝した場所がふだんと同じかどうか（問20）、ということを基準とすることにする。この2つの間で、表12のように4つのパターンをつくる。

各パターンをそれにあてはまる回答数も含めて示す。

- A：普段通りに過ごし、いつもと同じところに就寝した（72人）
- B：普段通りに過ごし、いつもと違うところに就寝した（6人）
- C：違う過ごし方をし、いつもと同じところに就寝した（226人）
- D：違う過ごし方をし、いつもと違うところに就寝した（221人）

表12 地震当日の夜、夜の過ごし方別・就寝した場所別パターンA～Dとその数

		就寝した場所（問20）		合計
		いつもと同じところ	いつもと違うところ	
当日の夜の過ごし方（問14）	普段通りだと思う	72 A（72）	6 B（6）	78
	違う過ごし方をした	226 C（226）	221 D（221）	447
合計		298	227	525

※いずれかまたは両方の設問に無回答の51票をのぞいている

Aパターンは、設問通りに書くと「地震当日の夜、地震がなくても、おおむね同じような行動をしたと思う」かつ「いつもと同じところで就寝した」と答えた学生たちである。地震の影響をあまり受けなかった、と解釈できる。72人おり、さらに住まい別に分けると下宿55名、自宅生15名となる。

Bパターンは「いつもと違うところ」に就寝したが、「普段通りの過ごし方」をしている、ということになる。これはいささか考えにくい。当然ながらあまりいないが、6人いた<sup>\*10</sup>。パターンとはしておくが、例外的なものである。

Cパターン、Dパターンについては、「普段と違う過ごし方」の具体的な内容を問16で

聞いているので、それにあわせてのようにさらに数パターンつくった。枝番は問16の選択肢の番号による。

表13に各パターンの人数、その「大学とその近辺」576名に占める割合、事例として表14にとりあげたサンプル数を示す。

表13 4つのパターン

		人数	構成比	表14に掲載したサンプル数
A	普段通りに過ごし、いつもと同じところに就寝した。	72	12.5%	4
A-1	下宿生	55	9.5%	3
A-2	自宅生	15	2.6%	1
B	普段通りに過ごし、いつもと違うところに就寝した。	6	1.0%	1
C	違う過ごし方をし、いつもと同じところに就寝した。	226	39.2%	14
C-1	自分の下宿に友人が集まった。	100	17.4%	8
C-2	自分の実家に友人が集まった。	3	0.5%	
C-3	近所の人など、友人以外の住居に集まった。	1	0.2%	
C-4	文大の図書館で夜を過ごした*11。	5	0.9%	1
C-7	その他の場所で過ごした	3	0.5%	
C-8	普段と同じ場所にいたが、普段と違う過ごし方をした。	111	19.3%	5
D	違う過ごし方をし、いつもと違うところに就寝した。	221	38.4%	14
D-1	友人の下宿に集まった。	177	30.7%	9
D-2	友人の実家に集まった。	3	0.5%	
D-3	近所の人など、友人以外の住居に集まった。	3	0.5%	
D-4	文大の図書館で夜を過ごした。	18	3.1%	3
D-6	実家に帰ることにした。	4	0.7%	
D-7	その他の場所で過ごした。	14	2.4%	2
D-8	普段と同じ場所にいたが、普段と違う過ごし方をした。	2	0.3%	

※構成比は「大学とその近辺」576が分母

#### 4.2 事例に関するコメント

最も多いパターンはD-1「友人の下宿に集まった」の177人である。これとC-1「自分の下宿に集まった」100、数は少ないがC・D-2、C・D-3などをあわせた「集まって過ごした」行動パターンの抽出が、本調査の目的であった。事例としてはC-1から8例、D-1から9例、全部で33例を表14に示している。

いずれもコンビニエンスストア、スーパーなどの商店、友人の下宿をまわって、当日就寝した場所に行っている。ちなみにパターン別の平均場所数を見ると、A：3.0ヶ所、B：3.5ヶ所、C：3.9ヶ所、D：4.3ヶ所、全体：3.75ヶ所となっている。また、問22によると、当日宿泊した場所には、「もともとそこにいた」23.5%を含め、11日18時頃までには64.6%、23時までには89.9%の学生が到着している。

冒頭に出した山岸の体験はD-1にあたる。訪れた場所を記述すると、「友人の下宿→コ

表14 パターン別学生の行動例（1）

No ID	パター ーン	プロ フィール	地震時 していた こと 問5	被災場 所 問2・ 4	地震発生直後から訪れた場所 (問13) *12	就寝場所	就寝場所 への到着 時 問22	過ごし方 問16・17
No.1 20036	A-1	初4男・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿	ふだんの住 まい	もともと そこにいた	
No.2 20141	A-1	比4男・ 下宿	勉強・研 究	都留市 立図書館	その他の建物→自分の下宿 →コンビニエンスストア→ スーパー→友人の下宿	ふだんの住 まい	16	
No.3 10052	A-1	社2男・ 下宿	学童保育 に参加し ていた	谷村第 一小学 校	小学校→コンビニエンススト ア→友人の下宿→自分の下宿 →コンビニエンスストア→ 友人の下宿→自分の下宿	ふだんの住 まい	25	
No.4 10054	A-2	社2女・ 自宅	屋内でく つろぐ	自分の 実家	自分の実家→文大図書館→そ の他の店舗→コンビニエンス ストア→※自分の実家	ふだんの住 まい	20	
No.5 32096	B	初3男・ 下宿	寝ていた	自分の 下宿	自分の下宿→コンビニにて夜 勤	コンビニ・ 寝てない・ 夜勤	23	
No.6 10045	C-1	初4女・ 下宿	サークル	音楽棟	音楽棟→自分の下宿→友人の 下宿→コンビニエンスストア →文大図書館→自分の下宿	ふだんの住 まい	23	下宿に、2人集 まった
No.7 10298	C-1	初4女・ 自宅	サークル	体育館	体育館→友人の下宿→自分の 実家→バイト先→友人の下宿 →コンビニエンスストア→友 人の下宿→友人の下宿→自分 の実家	ふだんの住 まい	25	下宿に、5人集 まった
No.8 20155	C-1	比2男・ 下宿	サークル	テニス コート	テニスコート→自分の下宿	ふだんの住 まい	18	下宿に、6人集 まった
No.9 32033	C-1	英4女・ 下宿	友人と先 輩の卒業 アルバム の作成	教室	3号館ホール→文大図書館→ コンビニエンスストア→友人 の下宿→自分の下宿→コンビ ニエンスストア→近所の知り 合いの家（文大の友人を除 く）→コンビニエンスストア →自分の下宿	ふだんの住 まい	19	下宿に、2人集 まった
No.10 20038	C-1	初3男・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→友人の下宿	ふだんの住 まい	22	下宿に、8人集 まった
No.11 30083	C-1	社3男・ 下宿	移動して いた	歩行中	道路→自分の下宿→友人の下 宿→スーパー→文大図書館→ 友人の下宿→自分の下宿	ふだんの住 まい	18	下宿に、6人集 まった
No.12 32046	C-1	社3女・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→コンビニエンス ストア→文大図書館→自分の 下宿	ふだんの住 まい	24	下宿に、3人集 まった
No.13 32084	C-1	初4男・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→スーパー→その 他の店舗→その他の店舗→コ ンビエンスストア→コンビ ニエンスストア→自分の下宿 →友人の下宿→自分の下宿	ふだんの住 まい	25	下宿に、3人集 まった
No.14 32136	C-4	比4男・ 下宿	アルバイ ト	アルバ イト先・富 士急ハ イラン ド	富士急ハイランド→自分の下 宿→友人の下宿→文大図書館 →コンビニエンスストア→ スーパー→自分の下宿	ふだんの住 まい	23	図書館で過ごした
No.15 30006	C-8	英4女・ 下宿	食事	店舗	飲食店→スーパー→コンビニ エンスストア→自分の下宿→ コンビニエンスストア→自分 の下宿	ふだんの住 まい	16	場所は同じだが、 入手できるだけ食 料品を購入し、早 い時間から寝た

表15 パターン別学生の行動例 (2)

No ID	パタ ーン	プロ フィール	地震時し ていたこ と	被災場 所	地震発生直後から訪れた場所	就寝場所	就寝場所 への到着 時間	過ごし方
No.16 30088	C-8	社4女・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→文大図書館→ スーパー→文大図書館→自分 の下宿	ふだんの住 まい	24	場所は同じだが寝 る直前0:00まで 文大図書館にいた
No.17 10025	C-8	英2女・ 自宅	屋内でく つろぐ	自分の 実家	自分の実家→バイト先(コン ビニ)→自分の実家	ふだんの住 まい	もともと そこにい た	場所は同じだが、 家族が一つの部屋 に集まり過ごした
No.18 20024	C-8	英2女・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿	ふだんの住 まい	もともと そこにい た	場所は同じだが、 早く寝た
No.19 34002	C-8	比4男・ 下宿	屋外でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→コンビニエンス ストア→スーパー→文大図書 館→自分の下宿	ふだんの住 まい	11日時刻 不明	場所は同じだが、 いつでも避難でき るよう荷物をまと めた
No.20 12	D-1	社2女・ 下宿	サークル	教室	1号館2階の教室→1号館前→ 自分の下宿→その他の店舗→ 友人の下宿	友人の下宿	19	下宿に、5人集 まった
No.21 10274	D-1	社3男・ 下宿	サークル	体育館	体育館→友人の下宿→スー パー→友人の下宿	友人の下宿	19	下宿に、12人集 まった
No.22 10406	D-1	国3女・ 下宿	サークル	教室	1202教室→文大図書館→自分 の下宿→友人の下宿	友人の下宿	17	下宿に、2人集 まった
No.23 31015	D-1	比4女・ 下宿	サークル	教室	図書館以外の文大施設→文大 図書館→コンビニエンススト ア→アルバイト先→自分の下 宿→友人の下宿	友人の下宿	20	下宿に、2人集 まった
No.24 10130	D-1	国4女・ 下宿	屋内でく つろぐ	友人の 下宿	友人の下宿	友人の下宿	もともと そこにい た	下宿に、4人集 まった
No.25 33044	D-1	社3男・ 下宿	PCをつ けていた	自分の 下宿	自分の下宿→友人の下宿→コ ンビエンスストア→スー パー→文大図書館→友人の下 宿	友人の下宿	18	下宿に、10人集 まった
No.26 10073	D-1	比4女・ 下宿	屋内でく つろぐ	友人の 下宿	友人の下宿→コンビニエンス ストア→友人の下宿	友人の下宿	18	下宿に、7人集 まった
No.27 20100	D-1	初3男・ 下宿	ショッピ ング	店舗	スーパー→自分の下宿→友人 の下宿→文大図書館→友人の 下宿	友人の下宿	20	下宿に、8人集 まった
No.28 30059	D-1	社2男・ 下宿	屋外でく つろぐ	友人の 下宿	友人の下宿→自分の下宿→友 人の下宿→友人の下宿→その 他の店舗→友人の下宿→文大 図書館→友人の下宿	友人の下宿	25	下宿に、8人集 まった
No.29 10039	D-4	国3女・ 下宿	サークル	教室	1202教室→自分の下宿→友人 の下宿→文大図書館	文大図書館	20	図書館で過ごした
No.30 20008	D-4	英2男・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→友人の下宿→文 大図書館	文大図書館	23	図書館で過ごした
No.31 33036	D-4	社2女・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿 →コンビニエン スストア→スーパー→飲食店 →文大図書館	友人の下宿	25	図書館で過ごした
No.32 23	D-7	社4男・ 下宿	屋内でく つろぐ		コンビニエンスストア→その 他の店舗→自分の下宿→コン ビエンスストア→自分の下 宿→コンビニエンスストア	バイト先	20	そのほかバイト先
No.33 10095	D-7	国2女・ 下宿	屋内でく つろぐ	自分の 下宿	自分の下宿→図書館以外の文 大施設→自分の下宿先の管理 人室→(※後略)	管理人室	16	下宿先の管理人室 に8人集まった

コンビニエンスストア→スーパー→自分の下宿→友人の下宿」となる。特に「集まって過ごした」C-1、D-1では、山岸のケースは、おそらく決して特殊な例ではなかったことがわける。

## 5. まとめ

本調査では、行ったアンケート調査のうち、「大学とその近辺にいた学生たち」が当日、夜どんな動き方をしたか、に焦点化して論じた。

本調査から得られた知見は以下の通りである。

- ① 2011年3月11日の地震発生時には、回答者のうち53.5%（576名）の学生が大学とその近辺にいた。
- ② 大学とその近辺にいた学生576名のおおむね8割の学生（462名）が当日の夜、地震を原因として「普段と違う過ごし方」をした、としている。実家から通学している学生ではこの割合は下がり、5割程度となる。男女別では少し女性の方が「違う過ごし方」をしたとしている学生が多い。
- ③ 「違う過ごし方」とは、友人の下宿などに複数で集まるなどして過ごしたことである。「違う過ごし方」をした学生の6割が、また「大学とその近辺」にいた学生全体で見ても、半数を超える学生（50.9%）が、このように過ごしており、かなりの規模でみられた行動であった、と言える。
- ④ 「違う過ごし方」をした理由は、「停電や断水で生活に支障が出たから」77.3%が最も高く、次いで「精神的に不安だったから」53.3%が高く、いずれも半数を超える学生が理由にあげている。また、「精神的に不安だったから」に男女の差に顕著な違いがある（女性61%に対し、男性34%）。停電・断水などの理由は男女で差がない。
- ⑤ 「違う過ごし方」をした学生462名のうちわけは、下宿生425人、自宅生20人で、95.5%が下宿生である。また、男性150名に対して、女性は294名で、おおむね男性の2倍の女性が含まれる。
- ⑥ 友人の下宿などに集まった場合、集まった人数は平均で5人程度。男女間に差があり、男性の5割が5～9人、女性の6割が2～4人で集まっている。15名、20名という大人数が集まったケースもあった。
- ⑦ 友人の下宿などに集まった場合、「サークル・部活」「学科の友人」で集まっていることが多い。とくに人数がたくさん集まっているケースでは「サークル・部活」であることが多い。「学科の友人」の場合、小規模である。
- ⑧ 地震当日の夜、303名（57.0%）の学生が「いつもと同じところ」で就寝し、227名（42.7%）が「いつもと違うところ」と回答している。いつもと違うところで就寝した227名のうち、179名が「友人の下宿」で就寝したと答えている。
- ⑨ 地震発生直後から就寝時まで、当日の学生の行き先をパターン別に例示し、表14に示した。

## 6. おわりに

予想通り、多くの学生が当日「集まって夜を過ごしていた」ことを明らかにできた。そうした行動が「大学とその近辺」にいた学生の半数を超えてみられた、というのは、大学のまわりに集住しているという本学の特殊性ならでは、のことだろう。

**【共同研究者】** 山岸 良 (社会学科2012年卒)

### **【謝辞】**

本アンケート調査の実施にあたっては、授業の一部をさいてアンケート票の記入、回収を行っていただくなど、多数の専任・非常勤の教員のお世話になりました。また、各学科事務室にはアンケート回収のため便宜をはかっていただきました。また、事務局の方々にも回収率向上のためさまざまな協力をしていただきました。ここにお礼を申し上げます。

また、面倒なアンケートを記入、提出してくださった学生の皆様、ありがとうございます。

## 資料 アンケート調査の概要

## 1.1 調査の目的

2011年3月11日の東日本大震災時、震災当日に学生たちがどんな行動をとったかを明らかにすることを目的とする。

## 1.2 調査項目

地震発生時いた場所、地震発生時していたこと、発生時の行動、連絡・情報入手手段、地震発生後の行動・当日の宿泊場所（大学周辺にいた学生）、当日困ったこと、災害時の備え、災害対策への意見など計44問と自由回答。

## 1.3 調査対象、期間、方法

調査対象：2011年3月11日に都留文科大学に在学した学生で、11月に在学している人。

調査期間：2011年11月24日～2011年12月31日。

調査方法：A4・4頁のアンケート票に、調査対象者が直接記入する。

全学科の2～4年にもれなく調査票が配布できるよう、調査者が授業を選び、各授業の担当教員にアンケート票の配布、実施、回収を依頼した。

## 1.4 回収状況

総回収数は、1,085票であった。地震当日に在学していなかったもの、回答数が著しく少なかった5票をのぞき、有効票を1,080票とした。学科・学年の両方が明らかなものについて、回収率は42.7%である。学科別・学年別回収状況は表16の通り。

表16 学科別・学年別回収数

	2年	3年	4年	全学年	学年 無回答	大学院	全体
初等教育学科	194 31 16.0%	218 113 51.8%	231 111 48.1%	643 255 39.7%	5	0	260
国文学科	146 61 41.8%	142 44 31.0%	160 45 28.1%	448 150 33.5%	6	0	156
英文学科	148 72 48.6%	149 93 62.4%	153 80 52.3%	450 245 54.4%	7	0	252
社会学科	174 104 59.8%	166 90 54.2%	175 54 30.9%	515 248 48.2%	4	0	252
比較文化学科	122 37 30.3%	122 56 45.9%	138 51 37.0%	382 144 37.7%	6	2	152
全学科	784 305 38.9%	797 396 49.7%	857 341 39.8%	2,438 1,042 42.7%	28	2	1,072

※他に専攻科1名、学科・学年無回答7名を加えた計1080票を有効票とした

【引用文献】

山岸 良「東日本大震災時の学生たちの行動から読む防災意識と課題」(都留文科大学 2011年度卒業論文、2012年1月)

注

- \*1 今回のアンケート設計ではこうした票をうまくひろうことができない。「当日、授業期間に使っている住まい(下宿など)に帰宅する予定でしたか」という趣旨の設問を加えるべきであった。
- \*2 敷地内には「その他」の記述付き選択肢があったが、その19名については記述回答(テニスコート、音楽棟ほか)を再コード化して掲載した。
- \*3 女性と男性の住まい形態の差はほとんどなく(実家率=男性8%・女性6%)、そこから説明はできない。
- \*4 性別無回答18名を除く(462=150+294+18)。
- \*5 なお限定選択肢には「文大のクラブハウス棟で過ごした」を加えていたが、その回答は0であった。
- \*6 なお、集まった人数1人という回答が3票あったが、これは2人にいれた。「あなた自身を含むか否か」が、設問から不明だったためであろう。
- \*7 問21の「その他」の記述回答を整理、再統合化している。「恋人の実家」「彼氏の実家」などは「友人の実家」へ、「祖父母宅」は「自分の実家」とした。「管理人室」(アパートの管理人室の意)は「近所の人など、友人以外の住居」へ。「バイト先」「車中」「寝ていない」「ホテル等」は新たなコード。その上で問20と統合した。
- \*8 実家通学でありながら「ふだと違うところに就寝した」と答え、なおかつ「自分の実家」に就寝したと答えていることになるが、うち2名は前注の「祖父母宅」と記述したもの。
- \*9 体育館に就寝したというのは記述回答だが、誤りであろう。回答用紙を検討するとサークルで体育館でのバレー中に地震にあい、自分の下宿に数名の学生で集まって就寝した、と考えるのが妥当である。(ID 10422)
- \*10 回答票を検討してみると、1人はコンビニエンスストアで夜勤で「下宿に帰らずそこにいた」ということ。もう1人は、下宿生だが当日は実家で就寝した。これらは就寝場所は違ったが、日常的にもそうしたことはあり「普段通り」の範疇だった、ということなのだろう。残る4人は「友人の下宿」2、「友人の実家」1、「彼氏の実家」1に就寝したとなっている。これらも回答記載上のミスでなければ、同様の解釈ができる。
- \*11 C-4のパターンは実は想定外であった。すなわち選択肢「文大の図書館で夜を過ごした」は、図書館に宿泊したという意味のつもりで「ふだと同じ住まいに就寝することとは相容れないと考えていた。ところが、夜中まで図書館にいてそこから帰宅、ないし友人の下宿に行って就寝するという行動がかなりある。それが、No.16(C-4)であり、実はC-8に分類したNo.14と同じパターンである。
- \*12 1番目は地震発生時にいた場所。最後は就寝した場所。特に最後の場所は、問20、問21、問44からもわかり、記入漏れと判断した場合補正できれば補正した。※がついているのは書き加えて補正したものである。